

宰平の漢詩の続きを読む - その2

令和3年9月12日(日) 10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

はじめに

これまで広瀬宰平については、「半世物語」「宰平遺績」「鍊石餘響」を取り上げてきた。続いて「偷閒樂事・上」を令和3年度に取り上げ、残した「偷閒樂事・下」についても令和4年度にとりあげる予定にしていたが、その機会が無くなった。読み下さずに残こしたままにしておくのも気になったので、49年勤務の最後に三たび勇気をふるって「下」の漢詩を読み下してみる。訳については、各自で詩情豊かにつけていただくことを切に願う。

なお、宰平の三部の漢詩集は次に箇条書きしておく。

簿領餘事	安政	4年	30歳
鍊石餘響	明治	5年	45歳
偷閒樂事	明治	29年	69歳

偷閒樂事 下

觀梅於伏水城跡憶起鳥井氏事

世有榮枯與物同	世に榮枯有り、物と同じ
宜將樹木弔英雄	宜しく樹木を將 ^{やしな} い、英雄を弔 ^{とむら} うべし
梅花非復桃花様	梅花は復 ^{また} 桃花の様にあらず
猶是凜然高士風	猶お是れ、凜然として高士の風なり 高士：徳の高い人

埋骨梅林跡自存	梅林を埋骨して跡自ら存す
氷華雪 ^薬 表忠魂	氷華雪 ^{ずい} 薬、忠魂を表す
幽禽飛去黄昏後	幽禽飛び去り黄昏の後
千古空山月一痕	千古の空山に月一痕

木ノエニ葺は薬の俗字、葺は蕊の俗字

長春花

與他節物不同情	他の節物と情同じからず
開落何関寒暑更	開落何ぞ関わらん寒暑 ^{こもごも} 更なり
一任牡丹成富貴	一任牡丹富貴成つて 一任：ままよ
堪兼松樹共長生	松樹と長生を共に堪 ^た えん
翠楊難保千秋寿	翠楊保ち難し千秋の寿

紅杏纔全七日栄
誇我小園三尺底
此花独自有芳名

紅杏わづか纔まに七日の栄を全まつとうす
誇る我が小園三尺の底
此の花独り自から芳名有り

観蓮小倉池

曉從橋外倩輕船
故向汀灣破水煙
香霧濺衣如避雨
蓮花蓮葉没入肩

曉に橋外より輕船を倩やと
ことさらに汀灣に向いて水煙を破る
香霧は衣に濺いで雨を避くるが如く
蓮花蓮葉肩に没入す

十里横塘池水平
無双函菖小倉名
天将明際花将發
香霧晶瑩碎有声

十里横塘池水平らかに
無双函菖かんたん小倉の名
天将に明けんとする際きわわ、花将に發す
香霧晶瑩碎いて声有り

塘=堤

函菖：はすの花

晶瑩=晶瑩：光り輝く様

題松陰五代君墨竹

写来得意碧琅玕
露葉風枝墨未乾
別後三句絶音信
因君画竹問平安

写し来たりて得意碧琅玕ろうかん
露葉風枝墨未だ乾かず
別後三句音信絶え
君の竹画困り平安を問う

琅玕：美しい所

八月避殘炎
幽居暫滯淹
無人叩門戸
有鳥語茅簷
晚酌月臨榻
夜眠風戰簾
好斯高枕外
何復覺清恬

八月殘炎を避け
幽居しばらに暫く滯淹えんする
人の門戸を叩く無く
鳥の茅簷ちえんに語る有り
晚酌月榻とうに臨み
夜眠の風、簾すだれに戦そよぐ
好し斯れ高枕の外
何ぞ復た清恬せいを覺えん

滯淹：留まる

茅簷：茅の軒端

榻：寝腰かけ、寝台

清恬：清く穏やか

周圍纔十畝
不復要隣家
楊柳眠無影
薔薇老有花
尊酒樂生涯
眼下看何忍

周圍わづか纔まに十畝
復た隣家を要まず
楊柳は眠りて影無く
薔薇は老いて花有り
尊酒は生涯楽しむ
眼下に看て何ぞ忍ばん

炎天走火車

炎天に火車走る

呷尺温泉地

呷尺^{しせき}に温泉の地

呷尺：極めて近い

朝昏任意行

朝に昏^{こん}に意に任せて行く

徘徊踏松影

徘徊して松影を踏む

吟嘯和禽声

吟嘯^{ぎんしょう}して禽声と和す

吟嘯：声高く歌う

養性忘人事

性を養って人事を忘れ

安心絶世情

心を安けて世情と絶す

盆栽娛我眼

盆栽は我が眼を娛^{たのし}ませ

移植幾茎々

移植幾つかの茎々

幽居聊避俗

幽居^{いさき}聊か俗を避け

恰好四無隣

恰好^{かっこうよも}四に隣り無し

香草花間宅

香草花間の宅

清風月裡人

清風月裡の人

裡＝裏

醉郷忘富貴

醉郷は富貴を忘れ

詩國樂清貧

詩國は清貧を楽しむ

起臥涼床上

起臥涼床の上

誇吾自在身

誇る吾は自在の身

消除三伏熱

消し除^{のぞ}く三伏の熱

三伏：熱い盛りの時期

終日愛清冷

終日清冷を愛す

老去^{しやう}嘗山味

老い去りて山味^なを嘗めて

醉来薦海腥

酔い来りて海腥^{かいせい}を薦^{すす}む

腥：なまぐさい

映杯帆影白

杯に映じて帆影白く

扠坐竹風青

坐を扠いて竹風青し

況有蓮池在

況^{いわん}や蓮池の在有りて

先秋開半汀

秋に先んじて開く半ば汀

汀：泥の中

初等遊南都途上口占

路到邦分隔一川

路は邦分に到りて一川隔て

邦分＊地名

長橋百尺駅村煙

長橋百尺駅村の煙

岸高水涸絶通運

岸高く水涸れて通運絶え

閑却篷船幾劍先

閑却の篷船劍先幾つか

閑却：いい加減に打ち捨てて置く

篷船：とまをかけた船

冬夜述懷

南来北去鴈程途
與我鞋痕方合符
嘗世酸辛霜滿髮
憐人流落粟生膚
閱書温古挑寒燭
頑健尚懷憂國志
劍箱当枕似狂夫

南来北去^{がん}程の途
我が鞋痕^{まさ}と方に符を合わす
世の酸辛^なを嘗めて霜髮に満つ
人の流落を憐れみ粟膚に生ず
書を閱し古きを温め寒燭^{かか}を挑げ
頑健^な尚^{おも}う憂國の志
劍箱^{けんそう}枕に当たり狂夫に似たり

鴈程：斜めの

寒燭：乏しいともしび

頑健：健康

新春書懷

春風五十七回来
吹我吟髭雪作推
喜得兒孫好消息
故山慶事報梅開

春風五十七回来りて
我が吟髭^ひを吹いて雪推^なを作す
喜び得たり兒孫の消息を好く
故山慶事梅開くを報ず

都将世事附悠々
送旧迎新亦坐遊
富貴占来温與飽
主人春色在炉頭

都て世事に^{すが}將^{したが}い悠々に附さん
旧を送り新を迎えて亦た^{そぞろ}坐に遊そぶ
富貴占め来たり温と飽と
主人の春色炉頭に在り

春日諏訪山幽居雜詠

処々遊春節
如何多俗煩
鐘鑼説教寺
鑿鼓祭神村
黒帽疑鶺鴒集
紅裙似蝶翻
世間雜沓客
不敢叩吾門

処々に遊ぶ春節
如何に^{ぞくほん}俗煩多し
鐘鑼^{とら}説教の寺
鑿鼓^{とうこ}祭神の村
黒帽^{くろぼうてい}鶺鴒の集うを疑い
紅裙、蝶の翻えるに似る
世間^{ざつとう}雜沓の客
敢えて吾が門を叩かず

鐘鑼＝銅鑼

鑿鼓：つづみ

裙：すそ

神戸矚目

裝飾萬余戸
異同争擲金
旌帘表国力
楼閣突天心
車走煙千丈
帆停霞半陰

裝飾萬余の戸
異同争つて金を擲^{なげう}つ
旌帘^{せいれん}国力を表し
楼閣天心を突く
車走り煙千丈
帆停まり霞半の陰

矚：見る

擲：なげうつ

旌帘：旗と幟

湊川青一帯 湊川は青き一帯
仰見旧松林 仰ぎ見る旧松林

三月十九日過武佐駅

奔車或恐乱春霞 奔車或いは恐れる春霞乱れ
陣々東風吹帽斜 陣々東風帽を吹いて斜なり
荒駅蕭篠旧旗店 荒駅蕭篠旧旗の店
依然竹外有梅花 依然として竹外に梅花有り

陣々：絶えず続く様子
蕭篠：よもぎとしの、物寂しい

観花嵐山

芳時不復旧孱顔 芳時、旧孱顔を復せず
春色寺前橋外山 春色寺前に橋外に山
京地之花京女美 京地之花、京女の美
双妍併在碧流間 双妍併わせ碧流の間に在り

孱：よわい
妍：美しい

晚春河州途上

春夏之交知幾分 春夏之交わり知幾分
農家従是急耕耘 農家はより耕耘を急ぐ
未全黄菜花零落 未だ全く黄菜の花零落せず
中有蛙声呼緑雲 中に蛙の声の緑雲を呼ぶ有り

夏目村居偶然賦一律

寄身村落廢詩書 身を村落に寄せて詩書を廢す
田父生涯樂有余 田父の生涯樂余有り
五畝桑麻杜陵住 五畝の桑麻杜陵住み
半庭水竹渭川居 半庭の水竹、渭川の居
俄然簾影揺将雨 俄然簾影揺れ将に雨ふらんとす
催發雷師為命車 催し發す雷師車を命ず
此裡閑人無苦熱 此の裡閑人苦熱無く
也憑枕簟愛吾蘆 也た憑く枕簟吾が蘆を愛す

田父：田舎おやじ、農夫
俄然：にわか、急に
枕簟：まくらとむしろ

過舞妓湾

道入播州多古松 道は播州に入りて古松多し
蒼波送影翠重々 蒼波影を送って翠重々たり
再遊人老非無憾 再び遊人老い憾み無きにもあらず
舞妓猶在旧舞容 舞妓は猶お在す、旧き舞い容

城之崎湯島雑詠

水抱山圀湯島郷
適人温度似春陽
倘将靈液論功驗
起廢回生無尽蔵

水が抱き山は圀む湯の島の郷
人に適う温度は春陽に似る
もし靈液をもって功驗を論ずれば
廢を起し生を回らせ無尽蔵

倘将：もし、仮に

巧製麦茎無短長
麗華精妙似縑緗
新来京女競相購
七宝釵蔵五色箱

巧みに麦茎を製ちて短長無し
麗華精妙にして縑緗に似る
新たに來る京女は競いて相購う
七宝 釵 蔵す五色の箱

縑緗：うす黄色の絹織物

貴賤等分居不同
僻他紛鬧少交通
可憐多病青年子
笑在絲声肉臭中

貴賤等分居同じからず
他に紛鬧を避けて交通少なし
憐れむべし多病青年子
笑って絲声は肉臭の中に在り

紛鬧：ごたごたして忙しい

絲声：糸のようにか細い声

湯家分室互相通
交若旧知尊酒同
莫是青衿勉螢雪
読書声送北窓風

湯家室を分けて互に相い通じ
交 旧知の若く尊酒同じうす
是れが青衿、螢雪に勉むる莫かれ
読書の声、送る北窓の風

衿：えり

飯前浴後暫時間
歩々不勞心自閑
昨雨晴來翠如滴
新鶉啼度夏初山

飯前浴後、暫 くの時間
歩々 勞えず心自 閑なり
昨雨晴來たりて翠は滴る如し
新鶉啼き度る初夏の山

鶉：ほととぎす

分秧節近乱蛙頻
相伴黄昏歩水濱
一洗払雲湯島月
樓々映照浴余人

分秧節近く乱蛙頻りに
相い伴う黄昏の水濱を歩く
一洗雲を払う湯島の月
樓々映し照らす浴余の人

秧：なえ

雨中登日和山

故勞輕履任遅々
行見雲煙轉弄奇
不復與人同動靜
日和山上雨來時

故 に輕履を勞わり遅々に任す
行きて見る雲煙轉奇を弄す
復た人と動靜同じからず
日和山上、雨來る時

輕履：下駄

到津居村舟中浚

川尾海頭青一湾
潮和流水自潺湲
北洋咫尺休回棹
生怕風波大似山

川尾海頭青の一湾
潮和流水自^{せんかん}潺湲
北洋^{しせき}咫尺棹を回すを休む
^{せいぱく}生怕風波大いに山に似たり

潺湲：さらさら水の流れる様
咫尺：極めて近い距離
怕：おそれる

瀬戸村即事

但山無処不層崑
水到平流見海開
好閱地図論世界
波頭遠自滿洲来

但山の層は^{たか}崑からざる処無く
水は平流に到り海の開くを見る
好く地図を閱し世界を論ずれば
波頭遠く滿洲より来る

豊岡川所見

一川卅里水澄清
漾々潺々嚙岸鳴
高載柴薪舟不見
蒲帆截浪半敬傾

一川三十里水澄んで清く
^{ようようせんせん}漾々潺々、岸を嚙んで鳴く
高く柴薪を載せて舟は見えず
^{かほほ}蒲帆浪を^た截^{なか}って半^{そぼだ}ば敬ち傾く

漾々：ただよう
蒲帆：蒲の草で織る^{むしろ}った^{むしろ}筵の穂

天橋立

文殊寺外北洋遥
隔断沙洲青一條
江面潮来高似陸
布帆松際渡天橋

文殊寺の外北洋遥かに
沙洲を隔断して青の一條
江面に潮来たりて高く陸に似て
布帆は松際に天橋を渡る

青松一帶跨江津
天造橋姿看逼真
彷彿龍蛇將踴躍
玻瓈波底影粼々

青松一帶江津を^{またぎ}跨ぎ
天が造る橋姿を看て真に^{せま}逼る
龍蛇を彷彿するは將^{ようやく}に踴躍せんとす
^{はり}玻瓈の波底に影^{りんりん}粼々

踴躍=踊
粼々：水が清く石が見える様

下由良川

明媚山川淡蕩風
風煙依約與春同
舟中静座憾如此
説在古今歌集中

明媚山川淡蕩の風
風煙依約春と同じ
舟中静座^{うら}憾^{かく}み此の如し
説いて古今歌集の中に在り

入江州

但山若海儘周遊 但山若海 儘ことごとく周遊す
到处舟車任去留 到处舟車去留に任す
適口新鮮鯉魚美 口適かなう新鮮鯉魚の美
鑿腸求食入江洲 鑿腸ざんちよう 食を求めて江洲に入る 鑿腸：むさぼる腸

大津第一楼上作

湖面風稀波亦閑 湖面風稀れに波亦た閑かなり
二三帆影翠微間 二三の帆影すいび翠微の間
雲開雲合無常態 雲開き雲合ひ常態無し
陰顕幾回看叡山 陰顕幾回か叡山を見る

次韻男満正元旦作

幾処栖居是我天 幾処の栖居すい是れ我が天に
東来西往送年々 東来西往年々送る
笑顔似個瓶梅否 笑顔個の瓶梅びんばい似しや否や
喜汝今朝在膝前 喜び汝今朝膝前に在り

帰郷中似義子満和

帰期有約不曾愆 帰期約有りて曾かさねて愆あやまらず
正是冬初秋末天 正に是れ冬初秋末の天
教我先嘗新穫米 我を教して先ず新たに穫米を嘗なめましめ 教＝使 ～させる
百年請護此良田 百年護るを請う此の良田

従子伊庭貞剛帰自函館與余客寓於浪華

不話草枯談樹榮 草枯れて話さず樹榮えて談ず
榮枯一別若為情 榮枯一別若為いかんぞ情
柔青嫩緑深陰底 柔青嫩どんりよく緑深陰の底 嫩：若い
同語新鶉與老鶉 同語新鶉けん老鶉おうとともに 鶉：ホトトギス

讀江月齋稿

忠臣多死節 忠臣多く節に死す
国力亦將殫 国力亦た將に殫つきんとす
暮雨花空落 暮雨花空しく落ちて
陰雲月未團 陰雲月未だ團ならずや 團＝団
渥恩徹骨髓 渥恩あくおん骨髓に徹し
正義碎胸肝 正義胸肝を碎く

想見淋漓血
文詩留寸丹

想い見る^{りんり}淋漓の血
文詩寸丹を留どむ

淋漓血：したたり落ちる血

秋日訪友

疎々密々未全晴
一路秋村冒雨行
料合君家先我客
芭蕉窓外送棋声

疎々密々未だ全く晴れず
一路秋村雨を^{おか}冒して行く
料^{はか}りて君が家に我に先んじて客と合ひ
芭蕉窓外棋声を送る

疎々：まばらな様

胡枝花

帶露隨風氣力柔
柔條婀娜向人羞
夜深冷澹白於月
付與蟲声不勝秋

露を帯び風に隨い氣力柔らかに
柔條婀娜として人に向かいて^は羞じる
夜深^{れいたん}冷澹つきよりも白し
付與^{ちゅう}蟲^{すく}声秋に勝れず

婀娜：たおや

澹：あわい

蟲：虫の旧字

秋盡

落日寒煙弄物華
唯逢秋尽不容嗟
無常群雀集還散
滿畝西風晚稻花

落日寒煙物華を^{もてあそ}弄び
唯だ秋の尽きるに逢いて^{しき}容嗟せず
無常の群雀集いて^ま還た散る
滿畝西風晚^{とう}稻の花

容嗟：なげく

稻＝稲

山村小春

山村十月未全休
種麦有期忙似秋
非復林間温酒状
一家午飯在田頭

山村十月未だ全く休まず
麦を種るに期有り忙秋に似し
復た林間に酒状を温むるに^{あら}非ず
一家午飯田頭に在り

荒卷秀谷兄将還鹿兒島前夕開離宴於千帆楼

絲竹声中侑酒頗
醉來接膝盆相親
千帆忍見楼頭客
帆下明朝有一人

絲竹声中酒を^{すすむ}侑ること頗るに^{すこぶ}
醉來たりて膝を接し盆に相親しむ
千帆見るに忍ぶ楼頭の客
帆下明朝一人有り

絲竹：管弦

新春謝客或者非之戲作

不許柴門容易敲
護門有犬絶人交

許さず柴門容易に敲く
門を護る犬有りて人の交わり断つ

煙霞三昧由詩悟
酒肉生涯為仏抛
松樹猶存如旧友
梅花有契似同胞
浩然養氣閑無事
未必踏青遊近郊

煙霞三昧詩に由りて悟る
酒肉生涯仏の為に抛つ
松樹猶お存す旧友の如し
梅花契有りて同胞に似る
浩然氣を養い閑として事無し
未だ必ずしも踏青近郊に遊ばざる

浩然：ひろびろとして
踏青：青草を踏む
春の日の郊外の遊び

宿笠置村

欲拝靈蹤訪古僧
來投客舎剪吟燈
於今猶有異清濁
隔水村家呼べ不応

靈蹤を拝して古僧を訪ねんと欲し
來投客舎吟燈を剪る
今より猶お清濁を異にする有り
水を隔てる村家呼べど応えず

蹤：あと

月瀬雑詩

遠自山南跨水東
萬梅林在一眸中
春風二月吹香雪
滿地皎然凝不融

遠く南山より山水東を跨ぎ
萬梅の一眸の中に在り
春風二月香雪を吹いて
滿地皎然凝りて融けず

眸＝瞳

皎：白い

皚々開遍幾村々
欲被梅花奪我魂
一片氷心與誰共
香雲深處叩禪門

皚々開て遍く幾つの村々
梅花我が魂を奪わんと欲す
一片の氷心誰と共に
香雲深き處禪門を叩く

皚：白い

呼為香国好生涯
到處美人高士家
無怪闔鄉皆致富
一年活計在梅花

呼んで香国で為す好生涯
到る處美人高士の家
怪無く闔郷富を皆致す
一年の活計梅花に在り

月瀬香雪亭席上用小原竹香氏韻

不挾雲巒又石巔
林泉相接闔嬋妍
探梅念慮詩抛筆
觀雪幽情酒滿筵
香馥郁間纔有地
白糝糊外欲無天

挾ばず雲巒又た石巔
林泉相接して嬋妍を闔かわす
梅を探ねて念慮詩筆を抛つ
雪を觀て幽情酒筵に滿つ
香馥郁の間纔に地有り
白の糝糊外天無からんと欲す

韻：ひびき

巒：みね 巔：いただき

嬋妍：美しく麗しく

馥郁：良い香りが漂う

糝糊：ぼんやりとしている

着先鞭去存遺愛 先鞭を着けて去れば遺愛存し
誰慕拙翁能比肩 誰か拙翁を慕いて能く肩を比

帰路赴奈良

去躋山壑屢迷途 去りて山壑に躋りて屢途に迷う 壑＝谷
鶯語稀辺日欲晡 鶯語稀れなる辺り日晡ならんと欲す 晡：暮れる
折取溪南春一朵 溪南春の一朵を折り取りて 一朵＝枝
肩頭護得入南都 肩頭護り得て南都に入る

洪水二首

堤潰難防禦 堤潰え防禦難し
勢将害市区 勢は将に市区を害いせんとす
川心凸作凹 川心 凸凹と作り
橋脚有如無 橋脚は無きが如くに有り
舟倒衝家屋 舟倒れ家屋に衝り
柳低疑荻蘆 柳低れ荻蘆を疑う
水禽迷宿処 水禽宿に迷う処
薄暮乱相呼 薄暮乱れて相い呼ぶ

激浪無辺没闔蘆 激浪無辺闔蘆没し 闔蘆：全てのいおり
西村東落水中居 西村東落水中の居
休縁嘲樹求魚事 嘲るを休め樹を縁に魚を求める事
高柳梢頭捕鯉魚 高柳の梢頭鯉魚を捕らえる

避暑於舞妓浜得七絶若干首

湾頭旗店兩三扉 湾頭旗店兩三の扉 兩三＝二三
買酒村翁将古稀 買酒村翁将まさに古稀
却是嬋妍舞兒月 却って是れ嬋妍として舞兒の月 嬋妍：美しく麗しく
侑人晚酌靚雲衣 人に晚酌を侑めて雲衣を靚う

一雨晴来暑気微 一雨晴れ来りて暑気微なり
淡山映浪翠光圀 淡山波に映じて翠光圀む
併将潮勢兼風力 併わせ将に潮勢兼風の力
帆影如雲衝尾行 帆影雲の如く尾を衝いて行く

避来炎暑此帰休 炎暑避け来る此の帰休

面々高楼眺矚幽
笑與兒童試游浴
蘆芽風外夕陽洲

面々高楼眺矚幽に
笑って兒童と游浴を試み
蘆芽風外夕陽の洲

眺矚：遠くを見る
游＝遊

播山淡島別乾坤
此処関西一海門
遅速可驚蒸気力
白帆如止黒煙奔

播山淡島別れて乾坤
此処関西の一海門
遅速驚く可し蒸気の力
白帆止まるが如し黒煙奔る

一道潮通咫尺間
行帆如織往將還
大哉西国運輸物
渾入都門堆似山

一道潮通る咫尺の間
行く帆織るが如く往き將に還らんとす
大いなるかな西国の運輸物
渾て都門に入りて山の似し堆し

咫尺：極めて近い距離

夜歩浜頭感古躑
須磨寺近聴鳴鐘
松間山月魁奇影
人去空床有臥龍

夜浜頭を歩いて古躑を感じる
須磨寺近く鳴鐘を聴く
松間の山月魁奇の影
人去りて空床に臥龍有り

乙酉冬十一月重遊崎陽

暫留行李又因縁
此是関西欲尽辺
潜躍鮮鱗足魚介
依稀山水富風煙
懸崖紅葉清人寺
映浪彩旗英国船
請見天然良埠頭
與他築造不爭肩

暫く行李に留む又た因縁
此れ是の関西尽きんと欲する辺
潜躍鮮鱗魚介足り
依稀として山水風煙富む
懸崖の紅葉清人寺
浪に映ずる彩旗英国の船
請う見よ天然の良埠頭
他の築造と肩を争わず

依稀：ぼんやりとしている

鹿兒島所見

兵後人家半落成
焦蕘残礎路縦横
城山松柏為枯木
一双寒鴉報怨鳴

兵後の人家は半ば落成し
焦蕘残礎路縦横なり
城山松柏枯木と為り
一双の寒鴉怨を報じて鳴く

鴉：からす

客舎楼上作

遠来南国暫楼居
楼外風光興有余
隔海桜洲夜雲暗
幾星篝火釣松魚

遠く南国に來りて暫く楼居す
楼外の風光興に余り有り
隔海の桜洲夜雲暗く
幾星篝火松魚を釣る

松魚：かつお

独坐江楼夜奈何
異音不弁釣漁歌
性来嗜我忘憂草
裊々吹煙称薩摩

独り江楼に坐し夜いかん
異音弁せず釣漁の歌
性来嗜なむ我が忘憂草
裊々煙を吹いて薩摩と称す

忘憂草：かんぞう

裊々：たおやかな様

極南游跡薩摩州
投宿海楼三日留
新識里人來接我
冬蠅秋蛩話琉球

極南游跡薩摩の州
宿を海楼に投じて三日留まる
新たに識る里人來たりて我に接し
冬蠅秋蛩琉球を話す

蛩：こおろぎ

冬蠅秋蛩：にぎやかに？

過城山有感

將軍曾作巨魁身
一夢榮枯香火新
怨霧悲雲未全霽
滿山魂魄八秋春

將軍曾つて巨魁の身と作り
一夢榮枯香火新たなり
怨霧悲雲未だ全く霽れず
滿山魂魄八秋の春

一死由来毛羽輕
城山埋骨各為榮
就中忍読連墳字
姓氏相同五弟兄

一死の由来は毛羽輕し
城山骨を埋めおのおの榮えを為さん
なかんずく読を忍ぶ連墳の字
姓氏相同じくす五弟兄

十二月七日過玄海

經過屈指幾回哉
天色昏迷暮撥灰
島嶼有燈々未点
波濤卷雪々頻來
托身甲鐵船如豎
護枕玻璃窓欲摧
此際先生膽何大
一吟詩句酒三杯

經過指を屈すること幾回か
天色昏迷暮れて灰を撥ねる
島嶼燈有りて未だ点せず
波濤雪を卷いて雪頻りに來る
身を託す甲鐵船は豎の如く
枕を護る玻璃の窓は摧けんと欲す
此の際先生は膽何ぞ大なるや
一吟の詩句酒三杯

膽＝胆

紀南湯崎泉頗有効験人以賞之余来浴養痾・・・・

久為屈蠖耐艱辛 久く^{くつかく}屈蠖となつて艱辛に耐えて 屈蠖：しゃくり虫
將避都城歳晩塵 將に避けんとす都城歳晩の塵
伸脚弛肩身亦暖 伸脚弛肩して身は亦た暖か
温泉郷裏臥迎春 温泉郷裏臥して春を迎ふ

防寒遠在海南天 寒を防いで遠く海南の天に在り
可記明治二九年 記すべし明治二十九年
贏得一陽来復氣 ^{あま}贏し得たり一陽来復の氣
春雲靄々簇靈泉 春雲^{あいあい}靄々^{むらが}靈泉に簇る 靄：もや 靄々：雲がたなびく様

客舎南窓夕日妍 客舎南窓夕日妍なり 妍：美しい
疎々影暖煮茶煙 疎々たる影暖かく茶を煮る煙
先生浴後閑無事 先生浴後閑として事無し
滿腹陽春枕臂眠 滿腹陽春^{ひじ}臂を枕に眠る

江水成湾路作又 江水湾と成り路又を作し^な
春霞淡抹認漁家 春霞淡抹漁家を認む
唸鞋偏恠銀砂歩 ^{ぎんあひと}唸鞋偏へに恠し銀砂歩み 唸：吟の古字 うたう
如此温郷踏雪華 ^{かく}此の如し温郷雪華を踏む 鞋：わらじ

個是紀州南尽天 個是れ紀州の南天に尽き
海山^口突出古村連 海山突出古村連なる ^口突
松林猶有行宮址 松林猶お行宮の址有り
颯々千秋奏管絃 ^{きつさつ}颯々千秋管絃奏す

妙靈温液効如神 妙靈温液効は神の如し
永使郷民經幾春 永く郷民を^{して}使て幾春^へ経さしむ
鶴寿龜齡不敢擬 鶴寿龜齡敢えて^な擬らえず
家々七十歳余人 家々七十歳余りの人

欲注詩眸破海煙 ^{しぼう}詩眸を注ぎ海煙を破らんと欲す 眸：ひとみ
多時峭立望無辺 多時峭立望は無辺なり 峭：きびしく
飛鴻背上帶斜日 飛鴻背上斜日を^{おび}帶ぶ
明滅東洋万里天 明滅東洋万里の天

太平洋中忽憶起長三洲翁所贈之佳什・・・・

雖老猶能壯 老いと雖も猶およく莊たらん
奮然為此行 奮然此の行を為す
雄心輕險阻 雄心險阻軽く
豪氣勝平生 豪氣平生に勝る
相地談軍備 地を相て軍備を談じ
閱書忘世榮 書を閱して世榮を忘る
締交宜熱慮 締交宜しく熱慮すべし
殊域是多情 殊域是れ多情なり

殊域：外国

船中遺興二首

幾度回頭立 幾たびか頭を回して立つ
淼漫何所之 淼漫何くにか之く所か
日東春尽夕 日東春尽きる夕
米北夏来時 米北夏来る時
風穩太平洋 風穩やかに太平の海
檣懸無事旗 檣懸かる無事の旗
汽船神速甚 汽船の神速きと甚だし
不復惱舟師 また舟師を悩まさず

淼漫：海山のひろいこと

日東：日本の美称

米北：北アメリカ

檣：帆柱

二旬長海路 二十日の長い海路
白日似黄昏 白日は黄昏に似る
霧裏帆無影 霧裏の帆は影無し
風前浪有痕 風前の浪は痕有り
毎眠移枕席 眠る毎に枕席を移し
臨食飽鷄豚 食に臨んで鷄豚に飽く
桑港々猶遠 桑港の港は猶お遠く
茫洋欲断魂 茫洋として魂を断たんと欲す

旬：十日

桑港：サンフランシスコ

茫：とおい

船中似青年諸子

乾坤同一體 乾坤同一の体にして
日月似車輪 日月車輪に似たり
幾島多狼虎 幾島狼虎多く
外人豈鬼神 外人豈に鬼神なるや、否な
功名非僥倖 功名僥倖に非ず
富貴在艱辛 富貴艱辛在り

寄語青年子 寄語青年子よ
浪遊莫誤身 浪遊身を誤つ^な莫れ

途上

幾條鐵路響轟々 幾條の鐵路響轟々として
天地如奔衆眼驚 天地^{はし}奔る如く衆眼驚く
注意停車轉車処 意を注ぎ車を停めて車を転ずる処
南方誤向北方行 南方誤り北方に向いて行く

城門巖(地名)鐵路甚危険

高攀山去欲消魂 高く山を攀^よじ去きて魂を消さんと欲す
異状雲煙幾吐吞 異状雲煙幾たびか吐いて吞む
一道谿流湾又曲 一道谿流^{いりまが}湾り又た曲り
鐵車衝水入巖門 鐵車水を衝きいて巖門に入る

六月十日登常時多運(地名)鉦山逢風雪 常時多運：ジョージタウン
風雪霏々六月天 風雪霏々、六月の天 霏：もや
寒威凜烈聳吟肩 寒威凜烈、吟肩を聳^{そび}やかす
先生座在輕車内 先生座して輕い車の内に在り
不是跨驢孟浩然 是れ驢^{ろば}に跨り孟浩然ではない

下車而行半里許投宿

異邦盛夏散天花 異邦の盛夏天花散り
故踏銀砂不用車 ^{ことさら}に銀砂を踏んで車を用ひず
記得曾年從鉦事 記し得たり曾年鉦事に従ひ
雪蓑氷笠晚歸家 雪蓑氷^{きりゅう}笠晚に家に歸る

望落機山

遠遊未倦豈思還 遠遊未だ倦^うまず豈に還らんとする、否な
到処安寧不鎖関 到る処安寧関を鎖ざさず
比我富峰高幾許 我が富峰と比べ高きこと幾許か 富峰：富士山
夏寒雪白落機山 夏寒雪白しロッキーの山 落機山：ロッキー山

無矢倉瀑布

上流何処水雲困 上流何ずれの処ぞ水雲困む 無矢倉：ナイヤガラ
現出白虹天洩機 現われ出ずる白虹天機を洩る

畢竟太湖々口小 畢 竟 太湖の湖口小さく
噴為瀑布向空飛 噴いて瀑布と為って空に向かって飛ぶ
架高鉄橋行不難 高く鉄橋を架かかり行くところ難からず
留車橋上逞奇観 車を留め橋上奇観 逞し 逞：はつきりする
銀河倒落三千仞 銀河倒落三千仞
人在半空相對看人 人は半空に在りて相對して見る

華盛頓

華盛頓：ワシントン

曾從都会此遷移 曾て都会從り此に遷移す
絶大版図如予期 絶大なる版図は予期する如し
啼鳥落花人就睡 啼鳥落花人睡らんとす
日長議院閉門時 日長く議院の門を閉める時
全州大政一無偏 全州大政一たびも偏ること無し
占地中央重国権 地の中央を占め国権重し
記念塔辺行樂子 記念塔行樂の子
凱歌猶唱百餘年 凱歌猶お唱う百餘年

費府書感

費府：フィラデルフィア

百般工業尽隆昌 百般の工業隆昌を尽くし
霏霧輕煙遮太陽 霏霧の輕煙太陽を遮ぎる
名利堅州富強本 名利の堅州富強の本
猶存一字檄文堂 猶お存す一字檄文堂

紐育雜詠

紐育：ニューヨーク

暑兼市熱氣如蒸 暑さ市熱を兼ねて氣熱すが如し
正午炎塵豈可勝 正午の炎塵豈に勝へる可しや、否や
時看大都風俗異 時に看る大都風俗異なり
婦人頭上壳堅氷 婦人の頭上堅氷を売る

地勢三方紺碧堆 地勢三方紺碧 堆し
東当要処海門開 東は要処に当たり開門を開く
聳天々女灣頭上 天に聳える天女灣頭に立つ
曾自仏京婚嫁来 曾ては仏京より婚嫁して来る

天女：自由の女神
仏京：パリ 婚嫁：嫁入り

比肩英仏競繁華 肩を比べる英仏繁華を競ひ
靄々人煙歳々加 靄々たる人煙歳々加わる

靄：もや

蠮屈龍伸果如此 蠮屈龍伸、果たして此の如し 蠮屈龍伸：比喻・人の志を得る時
中天鐵路地中家 中天鐵路地中の家 龍勢蠮屈蠮屈万伸

湖邊寓居潮名日景有雅山水絶佳

弛肩此地暫忘還 肩弛む此の地暫く還るを忘る
一掃旅塵身自閑 旅塵を一掃して身は自ら閑かなり
米語英言都不解 米語英言都て解せず
半旬黙々坐看山 半旬黙々と坐して山を見る 半旬：五日

湖畔幽楼在柳陰 湖畔幽楼柳陰に在り
超然寄跡客情深 超然跡を寄りて客情深し
聴来無復他郷念 聴き来て復た他郷の念無し
鳥語叮寧不異音 鳥語叮寧音異ならず

四山積翠影如浮 四山積翠影浮ぶが如し
有似琵琶湖水流 琵琶湖の流れ似るに有りて
風景相同風土異 風景相同じにして風土異なる
朝嵐夜雨夢江州 朝嵐夜雨江州を夢みる 江州＝近江の国

七月望棹舟湖水遺旅懷

凉月清風未夜分 凉月清風未だ夜を分たず
徐々回棹水為紋 徐々に棹を回せば水紋を為す
倘使坡公遊此地 倘し坡公を使て此地に遊ばしめば 坡＝堤
豈誇赤壁二篇文 豈に赤壁二編の文を誇るや、否や

歸家似男満正

留意慇懃憐此翁 意に留め慇懃に此の翁を憐れむ 慇懃：物腰が丁寧で礼儀正しい
盤餐朝夕得相同 盤餐朝夕相同軸を得る
未全一飽青蔬菜 未だ全て一つの青蔬菜に飽きず
也薦海鱗三尺紅 也た薦む海鱗三尺の紅

阿倍野謁北畠將軍墓

霜露千秋似淚痕 霜露千秋淚痕に似て 謁：まみえる
苔碑一片姓名存 苔碑一片姓名存り
于今英魄慕楠氏 今于に英魄楠氏を慕い
対在金剛山下村 対す金剛山の下の村に在り

偶成

寄身商戸了生涯 身を商戸に寄せて生涯^{おわ}了る
塵事走奔紛若麻 塵事走奔紛れて麻の^{ごと}若し
恨與煙霞為久濶 恨は煙霞^{きゅうかつ}と久濶^なを為し 濶：ひろい
絶無山処占繁華 絶えて山無き処繁華を占める

連塘歩月

池頭風露湿衣吹 池頭風露衣を湿^{うるお}して吹き
故遂香芬移步遅 故^{ことさら}に香芬^{こうふん}を遂^{したご}うて歩を移すこと遅し 香芬：よいかおり
月映漣漪清似水 月は漣漪に映じ清きこと水に似る 漣漪：さざ波
花々誤發夜深時 花々は誤^{ひら}って發^{ひら}く夜深き時

塘＝堤

同我家長住友東江君遊攝北上野村宿頭司氏家

秋日留連不欲還 秋日留連還えるを欲せず 留連：夢中になる
村家投宿最清閑 村家に宿を投じて最も清閑なり
帰来猶結遊山夢 帰り来たり猶お遊山の夢を結ぶ
人在蕈香松影問 人は蕈^{しんこう}香の松影に問いて在り 蕈香：きのこ

攝＝撰

御代島増田氏被贈盆松々則島山之産蓋主人所培養云賦以鳴謝

曾在島山凌海雲 曾つて島山在りて海雲を凌ぐ
皮膚皴碧似波紋 皮膚^{しゅうへき}の皴^{しゅうへき}碧波紋に似たり 皴：しわ
盆松郎我新詩友 盆松郎我新詩の友 郎我＝和郎
筆架墨床分與君 筆架墨床君と分つ

過山陽道追想往事

曾奔崎港大嫌遲 曾つて崎港^{はし}を奔り大意に遅れることを嫌う
昼夜肩輿苦旅羈 昼夜^{けんよりょうき}の肩輿^{けんよりょうき}旅羈^{けんよりょうき}苦し 羈：たずな
慷慨詩存堪一笑 慷慨の詩は存す一笑堪へ 慷慨：なげき憤る
紅毛緑眼欲攘時 紅毛緑眼^{ほら}攘^{ほら}わんと欲する時 紅毛緑眼：西洋人
紅毛はプロテスタント

下阿武川

青山緑樹映川流 青山緑樹川流に映じ
一片輕舟占勝遊 一片の輕舟勝遊を占める
諳水篙夫能逞技 諳^{おんすい}水篙^{きょうふ}夫能^{たくま}く技^{たくま}を逞^{たくま}しくする
短竿容易下長州 短竿^{みかん}容易に長州を下る

遊耶馬溪三首

昔人頻賞讚	昔人頻りに賞賛す
山水尚依々	山水尚お依々たり
玉筍参天立	玉筍点に参して立ち
青嵐掠石飛	青嵐石を掠めて飛ぶ
求詩吟未妥	詩を求め吟未だ妥からず
欲画筆難揮	画かんと欲して筆揮ふこと難く
一路对奇景	一路奇景に対して
吾心淡忘機	吾が心は淡く機を忘る

杜鵑啼不歇	杜鵑啼きて歇まず	杜鵑：ホトトギス
躑躅滿溪花	躑躅滿溪の花	躑躅：ツツジ
峻岳三方聳	峻岳三方に聳びえ	
層巖半面斜	層巖半面斜なり	
彫来山有仏	彫り来たる山に仏有り	
鑿得石為家	鑿ち得たり石家を為す	
一目皆奇絶	一目皆奇絶なり	
豁然無物遮	豁然として物遮ぎる無し	豁然：開けた様

溪路行々尽	溪路行き行きて尽き
板橋半蔓藤	板橋半ば蔓藤
雲横長不去	雲横ぎり長へに去らず
巖仄似将崩	巖仄かにして将に崩れるに似たり
羅漢千年寺	羅漢の千年寺
達磨一鉢僧	達磨一鉢の僧
僧迎教我宿	僧迎えて我が宿を教え
禪話奈難能	禪話奈ぞ難ならず

日向路上

名山佳水在辺陬	名山佳水辺陬に在り	陬：すみ
神祖遺蹤是此洲	神祖の遺蹤是此の洲	遺蹤＝遺跡
十里曠原看作海	十里の曠原見て海と作す	曠原：広々とした原野
居然霧島立瀧頭	居然として霧島瀧頭に立つ	居然：どっしりと構える様

天草海上誦山陽翁詩因得小詩

吳山越水路非艱	吳山越水路艱しく非ず	誦：となう
---------	------------	-------

蒸気煙飛煙息間
倘使頼翁在今日
応将天草作江湾

蒸気煙飛煙息の間
倘し頼翁を^し使て今日在たらしめば
将に天草を^{かえ}応^なつて江湾を作さんとす

望阿蘇山

阿蘇千載旧孱顔
地在肥州隔世間
高眼誰論如此状
噴煙焦土不青山

阿蘇千載旧^{よわ}孱顔
地は肥州に在りて世間と隔つ
高眼誰か論^{かく}ぜん此の如き状
噴煙焦土青山ならず

孱：よわい

幡山矚目

湖勢湾環曲似弓
古丘城址憾英雄
当時百万対疆国
一目壺天盆水中

湖勢湾環曲は弓に似て
古丘城址は英雄を^う憾らむ
当時百万対疆の国
一目壺天盆水の中

矚：みる

疆：さかい

遊楽々園

移山引水似桃源
花木周圀絶世喧
楽々主人何処去
依然風月護庭園

山を移して水を引いて桃源に似る
花木の周圀世の^{かまびす}喧しきを絶す
楽々主人何れの処にか去らん
依然風月庭園を護らん

過番々駅

独過荒駅感會時
一夢卅年星易移
無乃奔事助行旅
春風任脚日遅々

独り荒駅を過ぎし^え會の時に感ずる
一夢三十年星移り易く
奔事行旅を助来るのではないか、否そうではない
春風に脚を任かせて日遅々たり

無乃：反語

竹生島

湖中捧出碧孱顔
蓊鬱樹林圀島山
始識乾坤為合一
既教天女嫁人間

湖中捧出碧^{よわ}孱顔として
^{おうしやく}蓊鬱の樹林島山を圀む
始めて識る乾坤合一を為す
既に天女を^し教て人間に嫁ぐ

捧：ささげ

蓊鬱：うっそと繁る

雨中下宇治川

不倩篙夫手棹船

^こ篙夫^{うつく}倩しからず手は船を棹さし

倩＝美

悠々任水下長川
風声近在蒹葭岸
細雨廉纖春若煙

悠々水に任せ長川を下る
風声近在^{けんか}蒹葭岸
細雨^{れんせん}廉纖春は煙の若し

蒹葭＝葦
廉纖：やすくよわい織物

偶成

先秋鴻鴈過江潯
伝得家書慰客心
落手欣前封未折
平安二字值千金

先秋鴻鴈^{こうがんつうじゅん}江潯を過ぎ
家書伝え得て客心慰む
落手欣前封未だ折られず
平安の二字は值千金

偶：たまたま
潯：ふち
落手：手に入れる

祝石山遠藤先生六十一壽

書画幾筐琴一張
先生身老志愈剛
自家常有南山壽
錦繡腸兼鐵石腸

書画幾く^{きよ}筐琴一張
先生の身老いて志^{いよいよ}愈剛
自家常に南山に壽有り
錦繡の腸は兼ねる鐵石の腸

筐：かこ、かご

重遊馬山淹留半月偶賦二律慰無聊

举家来不與心違
放棄世情忘是非
地勢山高雲漠々
風声秋近雨霏々
試含靈水芳存口
屢浴温泉香染衣
可愛妻孥能尽意
扶吾起臥共相依

家を挙げて来り心と違がわず
世情を放棄して是非を忘る
地勢山高く雲漠々として
風声秋近く雨霏々たり
試みに靈水を含んで芳は口に在り
屢^{しばしば}ば温泉に浴くして香は衣を染める
愛すべし妻と子能く意を尽くし
吾^{たす}を扶けて起臥し共に相依る

偶：たまたま 聊：いささか

霏：もや

屢：しばしば たびたび
孥＝子

憐我羸軀不可勝
絲々蓬髮白髯髻
養痾近減三回食
消暑宜嘗六月氷
松逕盤桓誘童子
巖扉剥啄訪禪僧
訪来心志将高尚
寺在山中第一層

憐む我が^羸軀勝るべからず
絲々蓬髮白髯^{ぜん}髻の髻
^{やまい}痾を養う近ごろ三回の食を減ず
暑を消す宜しく六月の氷を嘗むべし
松逕盤桓童子を誘ひ
巖扉^{はくたく}剥啄禪僧を訪ね
訪ね来たり心志は将に高尚せんとす
寺は山中の第一層に在り

羸：つかれる 軀：からだ

髻：たばねる

嘗：なめる

逕：小道 盤桓：うろうろする

九月念二同本庄一行氏遊京此日秋炎甚

評山品水走京師
事務駸々猶覺遅
困殺殘炎如座釜
満窓斜日透玻璃

山を評し水を品し京師を走る
事務駸々として猶お遅きを覚ゆ
困殺殘炎釜に座するが如し
満窓斜日玻璃に透る

京師＝京都
駸：はやくすすむ

天垂九月尚炎陽
復結鳧川夢一場
映水楼燈紅幾点
伴他山影臥涼床

天は九月に垂れ尚お炎陽
復た結ぶ鳧川夢一場
水に映ずる楼燈紅幾点
伴他山影涼床に臥す

鳧：かも

帰田書感

村家挙目半支離
往欲相尋無旧知
輕薄人情如豹変
多端国事或狐疑
う

村家目を挙げれば半ば支離
往きて相尋ねんと欲するも旧知無し
輕薄の人情豹変の如し
多端の国事或いは狐疑

多端：仕事が多くて忙しい 狐疑：疑

衰顔白首抛他鏡
緑樹青山建我碑
記念六十余歲月
昨非今は幾安危

衰顔白首他鏡を抛うち
緑樹青山我碑を建てる
記念す六十余の歲月
昨は非、今は是、幾つの安危

安危：安全と危険

緒方南湫老寄江湖多樂事・・・・

江湖多樂事
老作自由民
澗水宵々月
嵐山歳々春
心腸猶鐵石
邦國重君臣
一種超然処
異他失意人

江湖樂事多し
老い自由の民と作る
澗水宵々の月
嵐山歳々の春
心腸は猶お鐵石
邦國君臣重なる
一種超然たる処
失意の人は異なるようだ

江湖多樂事
風月與人寛
身健遊無倦
心閑眠亦安
読書常問古

江湖樂事多し
風月人寛くし
身は健にして遊に倦むくこと無し
心は閑にして眠りも亦た安し
書を読んで常に古を問う

飲酒好忘寒 酒を飲んで好く寒を忘れる
吾友書兼酒 吾が友は書と酒と 書＝本
養成錦繡肝 養成する錦繡の肝 錦繡：豪華で美しい物事 もみじのこと

江湖多樂事 江湖樂事多し
黽勉不偷閑 黽勉^{びんべん}閑を偷^{えらば}ず 黽勉＝勤勉
交易宮銅業 交易銅業を営み
艱難稼鉞山 艱難鉞山を稼ぐ
非関人忌憚 人の忌憚^{きたん}に関する事非ざるに
宜守我痴頑 宜しく我が痴の頑なるを守るべし
親愛情如此 親愛の情^{かく}此の如し
举家談笑間 举家談笑の間

江湖多樂事 江湖樂事多し
各自一家風 各自一家の風
草木培栽地 草木培栽の地
児孫教育功 児孫教育の功
朝餐嗜淡泊 朝餐淡泊を嗜^{たしな}み
晚歩任西東 晚歩西東に任す
雖未離塵墨 未だ塵墨を離れずと雖も
煙霞存意中 煙霞意中に存す

江湖多樂事 江湖樂事多し
梅外竹為門 梅の外に竹は門を為す
屢訪同胞宅 屢^{たびた}び同胞の宅を訪ね
不迎高士軒 高士の軒を迎えず
塵囂如鳥囀 塵囂^{じんごう}鳥の囀^{さえず}の如し 塵囂：きたなくてうるさい
小住擬蜂屯 小住蜂屯を擬^{まね}る 蜂屯：蜂が集まるように寄り集まる
毀與休深感 毀^{きよ}與深感を休め 毀與：壊すと与える
笑傾綠半樽 笑って綠半樽を傾けん

江湖多樂事 江湖樂事多し
老境古風存 老境古風存す
高士琴書賜 高士琴書の賜
深仁雨露恩 深仁雨露の恩
秋懷紅葉寺 秋懷紅葉の寺

春夢翠楊村
不厭落人後
自無憂惱根

春夢翠楊の村
厭いとわず人後に落る
自ら憂惱の根無し

須磨寓居

家在砂明松黯間
風光依約旧汀湾
追懷往事無余念
歩々移時翻見山

家は砂明くろるく松黯くろき間に在り
風光依約旧汀の湾
往事を追懷すれば余念無し
歩々時に移しひるがえ翻ひるがえって山を見る

依約：より結ぶ 結びつける

江湾漁業待潮来
事太匆忙人勇哉
澁刺一籃分與否
先生晚酌欠羹材

江湾の漁業潮を待つて来る
事太匆忙人勇なるか
澁刺一籃かご分け與う否な
先生の晚酌羹材を欠く

事太=事大 弱い者が強い者に従う
匆=匆=忽 あわただしい
羹：あつもの

須磨村落界西東
源盛平衰是此中
宮址依然誰忍間
千年遺恨聽松風

須磨の村落西東を界へだてる
源が盛え平が衰ふ是れ此の中
宮址依然として誰か間を忍ばん
千年の遺恨松風に聴く

※源氏と平家を対比

寒厨用意潤枯腸
一酌陶然入醉郷
最賞磯馴好下物
調和得羸淮南王

寒厨の用意枯腸を潤し
一酌陶然酔郷に入る
最も賞めでる磯馴そなる好下物
調和羸あまりし得たり淮南王

淮南王：漢の高祖の孫

余勤仕住友家殆五十七年矣今茲明治廿七年冬十一月・・・・ 殆：ほとんど
五十七年如夢飛 五十七年夢の如く飛び
恍然尋跡々多非 恍然跡を尋ね跡多く非ざる
閑雲野鶴從今後 閑雲野鶴今より後
來我園中不許帰 我園中に来りて帰るを許さず

明治廿七年十二月下旬遊南湯崎留殆三月得七律五首

保老幾回来此郷
南邦風物不尋常
寒如医治梅春信
節尚蘇醒菊晚香

老い保って幾回か此の郷に来る
南邦の風物尋常ならず
寒は医治の如く梅春信
節は尚お蘇醒そじょう菊晚香

金液浴場開海角
白河宮址在崇岡
飄然試杖知何処
旧釣磯辺好夕陽

金液の浴場角を開き
白河宮址は崇岡に在り
飄然杖を試して知るは何の処
旧い釣磯辺は好夕陽

飄：つむじ風

一村沿海小寰区
占領風光巧結蘆
前後孱顔露鉛鐵
西南湛露蘸菰蒲
絶無貧婁泣求食
豈有吏人来促祖
畢竟温泉天恵賜
千年未見話榮枯

一村海に沿う小寰区
風光を占領して巧みに蘆を結ぶ
前後孱顔鉛鐵露わし
西南湛露菰蒲を蘸す
絶無貧婁泣いて食を求め
豈に吏人の来りて祖を促す子も有りや、否や
畢竟温泉は天からの恵まれた賜もの
千年未だ見ず榮枯の話を

孱：よわい

婁：やつれる

畢竟：つまり

免世負擔休我肩
醉余画亦儘安眠
花開叢沓多湯客
雨霽喧闐喚渡船
三尺童兒能浴海
八十老父尚耕田
南州自有南山福
壽域如斯人欲仙

世負担を免かれ我が肩を休む
醉余の画亦た安眠を儘す
花開き叢沓なり湯客多し
雨霽れ喧闐渡船喚く
三尺の童兒能く海に浴海し
八十の老父尚お田を耕す
南州自から南山の福有り
壽域は斯の如く人仙ならんと欲す

擔=担

儘=盡=尽

叢：くさむら 集まる

霽=晴

喧闐：やかましくうるさい

山有礦泉村有鉛
鉛村名古数家連
雨晴島嶼遥觀雪
艦走汀洲近捲煙
芝石如雲々出岫
平原皆草々為氈
不知七境詩中過
半日徜徉無俗纏

山は礦泉有りて村鉛有る
鉛村名古数家連なる
雨晴れて島嶼遥かに雪を觀て
艦走りて汀洲近くは煙を捲く
芝石雲の如し雲岫を出でて
平原の皆草草氈と為す
知らず七境詩中に過ぎ
半日徜徉して俗纏無し

岫：みね

徜徉=逍遙 俗纏：俗なまとめ

殘軀自適浴温泉
温飽欣吾得両全
逃世難逃投酒国
避名不避懇詩田

殘軀自適温泉に浴す
温飽欣吾両つながり全きを得る
世の逃れ難きを逃れ酒国に投ず
名を避けずを避けて詩田を懇にする

軀=体

懇

球磨浦潤鯨衝浪
富峙峯遙蓮挿天
老説衛生非敢後
宜移健歩占風煙

球磨の浦潤く鯨浪に衝る
富峙の峯遙か蓮は天を挿す
老いて衛生を説き敢えて後れたるに非ず
宜しく健歩を移し風煙を占める

紀南途上

多植香柑生計安
闔郷稼穡不辛酸
値非如玉美如玉
到处店頭黄満盤

多く香柑を植え生計安し
闔郷稼穡して辛酸ならず
値は玉の如く非ず美は玉の如し
到る処店頭の黄は盤に満つ

闔：とびら 闔郷=全村
稼穡：植え付と収穫

過來不独賞煙霞
轉使詩人感物華
春雨秋風難判定
衰殘紅葉盛梅花

過ぎ来りて独り煙霞を賞せず
轉詩人を使して物華に感せしめる
春雨秋風の判定難し
衰殘の紅葉、盛りの梅花

書所感贈友人某

常招隱士不招鑿
高尚清談忘日移
静処得宣為藥石
自身有病自心知

常に隱士を招いて鑿を招かず
高尚清談日の移るを忘る
静けき処を宣を得て藥石と為て
自身病有りて自ら心知る

鑿：医者

致仕後呈春翠住友賢君

始得自由深感恩
永兼松菊契身存
願將寄跡三家邑
簾影茶声昼掩門

初めて自由を得て深く恩を感じる
永く松菊を兼ねて身に存すを契る
願わくば將に寄せて三家の邑を跡に
簾影茶声昼門を掩わんとす

明治廿八年乙未新春記喜

梅屈柳伸全始終
六十又八遇春風
青山未幸埋骸骨
笑在児孫遊戲中

梅屈し柳伸びて終始全し
六十八、春風に遇う
青山未だ幸いに骸骨埋めざる
笑って児孫の遊戲の中に在り

一家和氣伴啼鶯
身似花朝洗宿醒

一家和氣啼鶯を伴い
身は花の朝宿醒を洗うに似たり

栄辱恩讐付談笑 栄辱^{えいじよく}恩讐^{おんしゆう}談笑に付し 讐：あだ
新春不復旧時情 新春^ま復た旧時の情ならず

幸有妻孥在膝前 幸いに妻孥^と有り膝前に在り 妻孥=妻子
従容扶老護衰年 従容として老を扶け衰年を護る
老来更領安心地 老来更に領する安心の地
謝履陶巾得意天 謝履陶巾：履物にあやまり布に和らぐ

老躬埋在簿書叢 老躬^{きゆう}埋めて在簿書の叢^{くさむら}に在り 躬=身
論跡童時豈不同 跡を論じて童時と豈に童時と同じからずや、否な
齡近古稀纒欠二 齡^{よわい}は古稀に近く纒^{むす}に二を欠く
信人相見喚為翁 人の相を見、喚^よんで翁^なに為るを信ず

石橋雲来兄被贈征清戦勝詩集一読效顰賦五言四首

文明世所尊 文明の世は尊き所
大義與公論 大義と公論と
巨砲欧州賜 巨砲欧州の賜
名刀日本魂 名刀日本の魂
捕鯨平内海 鯨を捕って内海平かに
逐鹿迫中原 鹿を逐うて中原に迫る
盟約知何日 盟約知ること何れの日なるか
宜俱荷国恩 宜しく俱に国恩を荷なうべし

我邦曾有望 我邦は曾つて望有り
不啻護吾都 啻^ただ護吾が都を護らず
尊祖神猶在 尊き祖神猶お在り
猿公魂欲蘇 猿公の魂蘇ならんと欲し
劍声伝霹靂 劍声は霹靂を伝え
砲勢破嶽嶮 砲勢嶽嶮を破る 嶽嶮=緊張状況 嶽：けわしい 嶮：けわしい
進撃争先処 進撃先を争う処
兩軍如合符 兩軍符を合わす如く

旗章如日昇 旗章は日の昇るが如く
各国举尊櫛 各国^{こぞ}举つて尊櫛^{しゆう} 櫛=称
軍議殊深遠 軍議は殊に深遠
兵談占上乘 兵談は上乘を占め

晦明威海月
結合緑江氷
到处能扶弱
英雄不敢矜

晦明威海の月
結合緑江の氷
到る処能く弱きを扶く
英雄敢えて矜ぜず

矜：あわれむ

洋大有西東
開明存此中
那翁新戦術
孫氏旧遺風
砲艦傾山海
干戈仆草叢
可憐長髮子
燕雀泣樊籠

洋大く西東有り
開明此の中に存す
那翁の新戦術
孫氏の旧遺風
砲艦山海に傾き
干戈草叢に仆れる
憐れむへし長髮の子
燕雀泣樊籠に泣く

樊籠：とりかご

熊野山中

天欲黄昏山色朦
輿丁立杖話途窮
今宵求宿知何処
載石人家煙雨中
開成道路未全開
曲折没溪危機回
不啻山民輸木炭
鬱蒸緑樹製菌来

天は黄昏ならんなど欲し山色朦たり
輿丁杖を立てて途窮を話す
今宵宿を求める何れの処か知る
石を載せる人家は煙雨の中
道路を開成して未だ全開せず
曲折没溪して危機回る
啻だ山民は木炭を輸ばず
鬱蒸緑樹によって菌を製して来る

輿丁：かごかき

鬱蒸：むす

山深樹古有猿鳴
惹起羈愁不易行
伉儷名存夫婦坂
鞋痕足跡亦多情

山深く樹古く猿の鳴く有り
羈愁を惹き起こして行易からず
伉儷の名を存す夫婦坂
鞋痕足跡亦た多情

羈：たずな

伉：ならぶ 儷：ならぶ

鞋痕：あしあと

下熊野川舟中得五律五首

風景眞奇絶
老懷驚喜頻
巉巖詩骨格
松柏画精神
扠袖雲成繡
洗眸水似銀

風景眞に奇絶
老懷驚喜頻なり
巉巖詩骨の格
松柏は画精の神
袖を扠い雲繡と成り
眸を洗う水は銀に似たる

巉巖：高くそびえた岩

繡：ぬいとり

縦横回棹去
舟子不迷津

縦横に棹を回して去り
舟子津に迷わず

肴饌行厨満
舟中酒乍醺
水光浮鴨緑
松影動龍文
瀑注霏々雨
花蒸匝々雲
此遊忘人事
恍惚入仙群

肴饌^{こうせん}は行厨満たし
舟中酒^{たちま}乍ち醺^よう
水光鴨緑を浮かべ
松影龍文を動かす
瀑注霏々たる雨
花蒸^{そうそう}匝々たる雲
此の遊び人事を忘れ
恍惚として仙群に入る

醺=酔

霏霏：しきりに降る

霏：もや

匝匝：ぎっしりと詰まった様

匝：めぐる

名山屹双立
中有巨川流
蘇軾帰応晩
謝安来欲留
急灘如玉碎
浅瀬見魚游
老埃吾難歩
同行請莫尤

名山^{きわだつて}屹^きって双び立つ
中に巨川の流れ有り
蘇軾^{そしよく}帰^くりて晩れんと^す応る
謝安来たりて留めんと欲す
急灘^{きゅうたん}玉碎の如し
浅瀬に魚の遊ぶを見る
老埃^{ろうあい}吾れ歩^なき難く
同行請うて^な尤^な莫か

蘇軾：北宋の文人の東坡

謝安：東晋の名臣。

游=遊

埃：ほこり

宛然栖鶻地
不独見猿群
重嶂尖如筍
怪巖奇在雲
論山黄鶴画
遊蜀放翁文
異樹花三五
没流送馥芬

宛然^{すこつ}栖鶻^{すこつ}の地
独り猿群を見ず
重嶂尖^{すこつ}って筍の如し
怪巖奇なり雲在り
山を論じる黄鶴の画
蜀に遊ぶ放翁の文
異樹の花三五
没して流れ^{ふくふん}馥芬^{ふくふん}を送る

宛然：あたかも さながら

鶻：はやぶさ

嶂：みね

馥芬=香氣

全豹誰能尽
吾詩纔一斑
下流熊野海
深奥大和山
舟隠潺湲際
帆開隠映間

全豹誰か能く尽くさん
吾が詩^{わざか}纔^{わざか}に一斑
下流は熊野の海
深奥^{しんおう}は大和の山
舟隠^{せんかん}しは潺湲^{みぎわ}の^{みぎわ}際
帆開^{いんえい}く隠映^{いんえい}の間

潺湲：浅い谷川の流れ

雲嵐常不去 雲嵐常に去らず
蒼翠擁孱顔 蒼翠^{せんがん}孱顔を擁す 孱顔：弱弱しい顔

須磨寓居偶感古今

晴郊高处路透迤 晴郊高き処^{いひ}路透迤たり 透迤：斜めに行く
内裡蹤荒長麦禾 内裡^{しやうこう}蹤荒^{ぼつか}長し 裡＝裏 蹤：足あと
鎧影笛声帰幻夢 鎧影^{がい}笛声^{ふえ}帰^{かへり}幻夢 謳：うたう
松風村雨入謳歌 松風村雨謳歌に入る
如花開落盛衰穹 花開き落ちる如く盛衰の穹
與世推移貧富多 世と推移して貧富多し
鐵柺山腰鐵車走 鐵柺^{てつがい}山の腰に鐵車走り 柺：つえ
煙嵐不復旧須磨 煙嵐復^{もと}た旧の須磨にならず

明治廿九年元旦作

東風戸々旭旌飄 東風に戸々^{きよくしやう}旭^{ひるがえ}旌飄る 旌＝旗 飄：つむじ風
朝野歛声鶴雀跳 朝野の歛声に鶴雀^{かんじやくと}跳ぶ 鶴：こうのとり
敵国彈丸帰我用 敵国砲彈我が用を帰し
轉為祝砲賑三朝 轉^{ますま}す祝砲の為^{にぎわ}に三朝賑う 轉＝転

自鎖柴門謝送迎 自ら柴門を鎖^とぎして送迎を謝す
不関紳士賀正行 関せず紳士は正を賀して行く
人間富壽豈難獲 人間富壽豈に獲り難しや、否な
留意儉勤兼攝生 留意儉勤^{せつせい}攝生を兼ねる 攝＝摂

老軀久謝簿書煩 老軀^く久しく謝す簿書^{うるさ}煩し 軀＝身
醉臥炉頭儘枕罇 炉頭に醉臥して儘に罇^{ますま}を枕にす 罇：たる
天賜洪恩衣食足 天は洪恩を賜り衣食足り
又先梅柳得春温 又梅柳に先んじて春温を得る

伝統有男家業存 伝統男有りて家業存す
祥雲簇々又生孫 祥雲^{しやうしやう}簇々孫を生ず 簇：むらがる
乃翁樂事添繁劇 乃翁^{わたし}の樂事は繁劇に添え
昨夜梅花入夢魂 昨夜の梅花夢魂に入る

兒女向人嗤不差 兒女人に向かつて嗤^{わら}って差^{はじ}ず 嗤：わらう
朝餐坐散鬧嬉遊 朝餐坐到散じて嬉遊^{きゆう}に鬧^{さわ}ぐ 嬉遊：たわむれ遊ぶ

紅裙翠袖旧宮様
満室春声弄手毬

紅^{くん}裙翠袖の旧宮様
満室春声手毬^{もてあそ}を弄ぶ

裙：スカート

磨針嶺上矚目
曾遊^{ろうし}儂指廿三年
驛潑亭存亦可憐
天下興亡塵却外
湖湾面々旧風煙

磨針嶺上矚^か目
曾^{かがめ}つて遊ぶ指を儂めて廿三年
驛潑亭存す亦た憐れむべし
天下の興亡塵却の外
湖湾面々旧風の煙

矚：見る

丙申除夜有所感作

欲将骸骨委江湖
寄在須磨村一隅
勢也有時逢治乱
老而無事免榮枯
憐他官海鯢揺尾
喜我林栖鶴養雛
旧去新来多少惑
好誇天壽醉屠蘇

欲将に骸骨を江湖^{ゆだ}に委ねんと欲し
寄せて須磨村の一隅に在り
勢は時有りて治乱に逢い
老いて無事榮枯を免れる
憐な他は官の海鯢は尾を揺らし
喜ぶ我は林の栖鶴は雛を養う
旧去り新来りて多少惑ふも
好し天壽を誇りとして屠蘇に酔ふ

鯢＝鯨

七十自賀

寤寐無知歲月催
滿頭白髮雪成堆
身卑不願簪纓貴
志大将凶邦國財
旧夢尋蹤閑世界
新詩寄興小蓬萊
古来稀処為何事
唯喜仙遊壽域開

寤^ご寐^び無知歲月催^{せきたて}る
滿頭の白髮雪^{うずたかき}堆を成す
身^{いや}は卑しく簪^{しん}纓^{えい}の貴きを願わず
志は大にして将に凶らんとす邦國の財と
旧夢^{おも}蹤を尋ねんと閑世界
新詩興を寄せんと小蓬萊
古来稀な処何事を為^なさん
唯だ喜仙遊壽域を開く

寤：さめる 寐：ねる

簪纓：冠を固定するかんざしと紐
高官の意

卓矣東方君子郷
微軀常感聖恩長
不因齒髮悲哀老
且愛芝蘭留晚芳
恭帶勳章臨壽宴
擬携仙杖上華堂
怡逢花木好時節

卓^{すぐる}かな東方君子の郷
微軀常に感ず聖恩長として
齒髮に因る衰老を悲しまず
且つ愛^{しらん}ず芝蘭の晩芳に留む
恭^{うやうや}しく勳章を帯び壽宴に臨み
仙杖を携え華堂に上る^{なぞら}を擬える
怡^{よろこ}び逢う花木好時節に

軀＝身

芝蘭：善人や君子のたとえ

怡：よろこぶ

艶霧香雲渾吉祥	艶霧香雲 ^{すべ} 渾て吉祥なり	
漸脱塵羈得自由	漸 ^{ようや} く塵羈 ^{じんき} を脱し自由を得る	羈：たづな
花晨月夕儘悠々	花晨月夕 ^{ことごと} 儘く悠々	
煉丹不及葡萄酒	丹を煉って及 ^く ず葡萄酒	
守陰猶存鶴氅裘	陰を守って猶お存 ^{かくしやう} す鶴氅 ^{かわごも} の裘	鶴氅：鶴の羽で織った着物
膝下群孫罔左右	膝 ^{しつか} 下の群孫左右に罔み	
遐方旧友祝春秋	遐 ^か 方の旧友春秋を祝う	遐：とおい
豈将七秩誇吾壽	豈に将に七秩 ^{ちちつ} ならんとす吾が壽を誇り	秩：十年のこと
千古風流樂未休	千古の風流樂は未だ休まず	

おわりに

「偷閒樂事」はあまりにも多いので読み下しは「上」だけとして次回に回していた。ところが突如として、続いて解説する機会が無くなってしまった。令和2年度の年度末の限られた時間と競争しながら「下」も遂に読み下した。鍊石餘響と偷閒樂事の漢詩集を読み下すのに、足かけ3年を要してしまった。

今回もワードに無い漢字が、いきなり2句目から出て来て文字化するのに苦労した。薬を当て字として木ノ^エ葦を正しい字とし、更に薬の俗字であり、葦は蕊の俗字と重複しての説明となって欄外に記した。つづいて突も当て字として口突を正しい字としている。

漢詩は「起承転結」の並びと「韻」を踏む約束という形式が決まっており、形式に従って漢字を置いて行けば何とか漢詩が作れるはずであり、それを逆に遡れば漢詩を観賞できると考えるが、そもそも創作する力がないからそれも不可能である。唯々、一字一字を和語と拙い熟語で以って字づらを整えていったが、それでも何となく情景が見えてきた。しかし、宰平の心情に及ぶことは難しかった。その中でもアメリカ合衆国への旅行の箇所は、初めて海外研修でヨーロッパを旅行し異文化と出合った時に覚えた驚きの心境と重なった。

近代化の過程の中で形式主義を軽んじて、内容を重んじる個性的、独創的表現が重視される風潮になると物を書かなくなってきた。作詩、作文をしなくなった。心情を後世に伝えるとなると形式に頼らざるを得ない。仕事でも効率主義からマニュアルどりにすることが推奨される。日本語、漢語、横文字外国語と言語が増えてくるに反して、言語の基礎が閉塞状態になっていっている。

宰平の履歴に照らして漢詩を読んでいけば、状況を背景として詩情が理解できるのだが、それすらできない。とりあえず読み下したので、次の旗手たる村夫子は、それをかなえてほしい。